



発行所 十勝毎日新聞社 千080 帯広市東1条南5丁目 電話=編集2121、広告2323、総務・販売2222 ©十勝毎日新聞社 1988

進め宇宙開発

スペースポート調査団同行記

..... 5

スペースプレーンの開発をした点。調査団のメンバーで前進させようという四日間には「宇宙での黒鉛の熱サイクル」など発表された。日本は二、三年後我々にかかれた第一回極超音速飛行工部局製作所航空機技術本際会議。特に注目を集めたのは日本の発表で、「海外の出席者は「会議では超音速飛行研究分野において心強い仲間として日本に期待を高めた」と地元紙のグランド・フォークス・ヘラルド紙は高く評価した。発表後、日本の代表者が海外の専門家に取り巻かれている場面を多く目にした。

予想以上の反響

☆ レベル高い日本

理由の一つは米、欧州の各々が技術的なことよりも開発の取り組み状況や今後のスケジュールに力点を置いた発表だったのに対し、日本側は液体酸素の代わりに大気中の酸素を利用するレースエンジン

注目集めた研究発表

日本のS・プレーン紹介

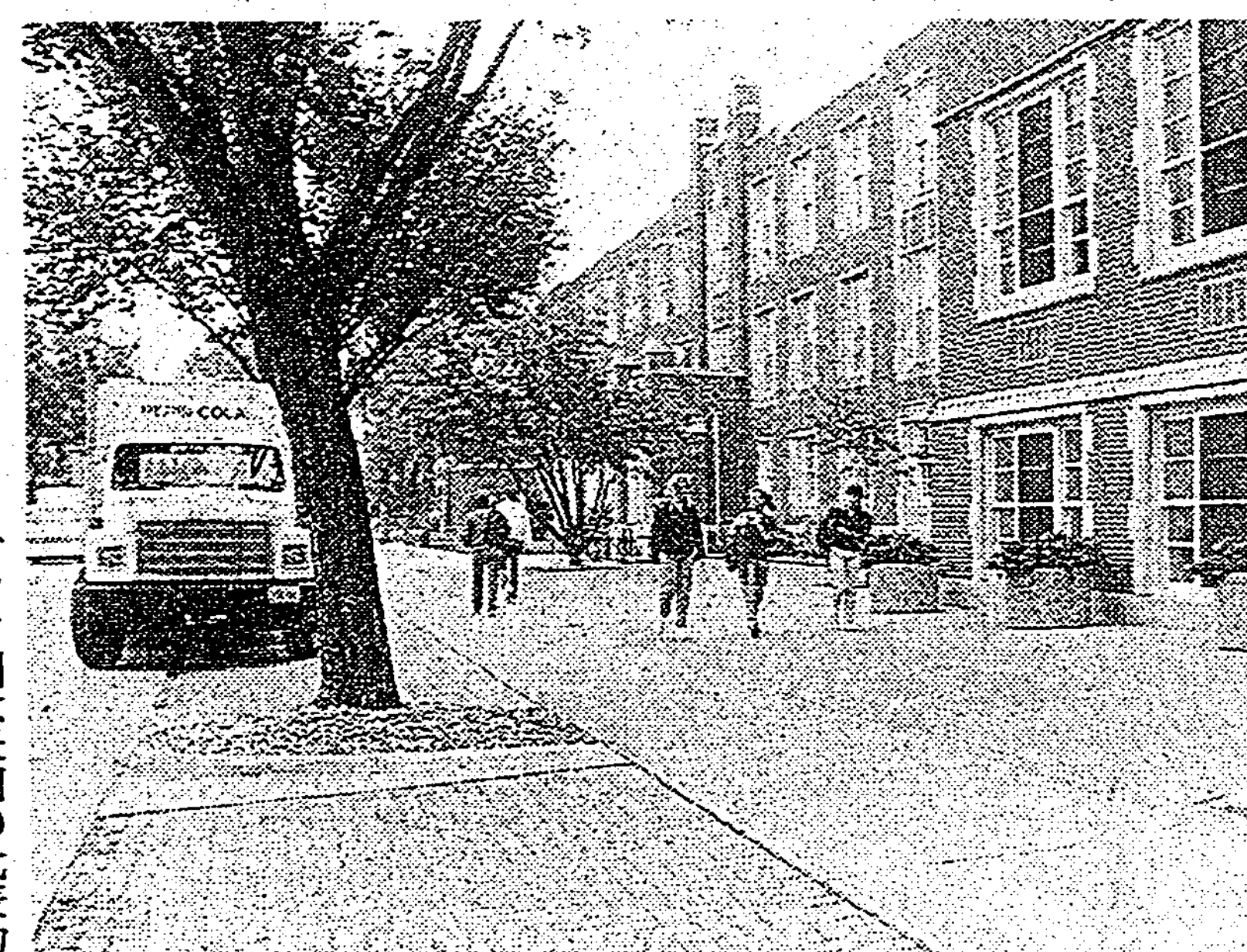
響かなりあった。発表だけ三戸成也チーフエンジニアは「これからの大変。認められたい」と意欲を燃やした。また、調査団の一人、川崎重工航空機事業技術本部

☆ 国を超え理解を

情勢交換のための協会を組織する足掛かりが出来た」と満面の笑顔をみせた。スペースプレーン調査のため、全体を網羅出来る地理的条件を生かして、人工衛星を利用した地球科学センターを大学に設置する準備を進めている。月面での農業



スペースプレーンの開発に向け新たな一歩を印した会議



会場となったノースダコタ大学構内

作業を可能にするための研究をするエネルギーセンターも検討している。とにかく大学から地域を盛り上げていきたい」とウェット教授。

☆ 基地誘致の努力を

この農業地帯に約300人もの世界の第一線の研究者が詰めかけた。それだけでも地域開発に果たすべき大学の役割が大きいことが分かる。その成功に自信を深めたウェット教授に最後に北海道のスペースポート構想の感想を聞いた。「日本も(スペースポートを)造らなければ、早ければ早いほどいいだろう。レジャ

小林 レンタカー 0155 5653

(近藤 政晴記者)

(1) (1)